年間第2週・金曜日 14. 聖性への召し出し

2024/04/02

年間第2週・金曜日

14. 聖性への召し出し

- 12使徒の召し出し。神は召し出し、そして堅忍のための恩恵をお与えになる。
- 一人間は召し出しを生きることで神に栄光を帰し、自己の生活を偉大なものにする。キリストは私たち皆を、主に従い、主を見倣い、主を知らせるようにと、招かれた。
- 一 神から受けた個人的な招きへの忠 実。
- 14. 1 12使徒の召命。招かれ、忍耐をもってやり遂げる恩恵を授けられるのは神です

祈って夜を明かされた後 1 、イエスは、彼に従い、後に地上で宣教をはいる12人の使徒を任命されました。私たちは、福音史家を今日のは、レ世・で思い出します 2 。彼らはパレーでで思います。大力の道に沿って、主に従って、立体がある。現在では、この使徒では、立外れた愛の対象になって、並外れた愛の対象になって、が、が、からないます。

 選ばれたのか不思議に思う必要はあ りません。主が彼らをお呼びになっ たのです。キリストによる全く自由 な選択の結果です。イエスは望んだ 人をお招きになりました。その結 果、彼らの召命の誉れと本質が生み 出されるわけです。後に彼らによく 言われていたように、「あなたがた がわたしを選んだのではなく、わた しがあなたがたを選んだ」³。 選択 は、いつも神によるものです。使徒 たちは、自分たちの賢さ、威光、有 力さを示すために書いたのではあり ません。彼らはイエスの招きに信仰 と寛大さをもって応えた、ごく普通 の男たちでした。

キリストは、ご自分で自由に選ばれるので、この呼びかけこそが、人々が受け入れる唯一の資格なのです。 たとえば、聖パウロは、信者たちに教え戒めるときの自らの権威を強調するために、しばしば手紙を次のように書き始めました。「人々からで もなく、人を通してでもなく、不者の てでもなく、キリストを通してでもなく、 そのではないます。 中から復活させたたパウロ」、 かって使徒とされたがもしているではないでものではないではいたがある。 を招きないます。 を通しています。 を通しています。 中から復活されたがかっています。 ではないます。 を通しています。 ではないます。 ではないます。 ではないます。

たちの行いによるのではなく、神ご 自身の計画と恵みによるのです| 6。実際に、神は奉仕と仕事のため に、神の助けによって成し遂げるこ とになる仕事には、明らかに相応し くない徳と資質の人々をお招きにな るのが常です。「兄弟たち、あなた がたが召されたときのことを思い起 こしてみなさい。人間的に見て知恵 のある者が多かったわけではな | ⁷ い。主は、世の贖いの仕事を続ける ためにも私たちをお招きになりま す。私たちは自分の弱さや自分の能 力と神が与えてくださった仕事との 間の不釣合いなことに驚いたり失望 したりすべきではありません。神 は、常により多くの善になることだ けをお与えになります。そして、神 は、私たちの良い意向と神に差し出 すことができる私たちのわずかな助 けだけを私たちに求めておられるの です。

14. 2 召命を果たすことによって、人は神に栄光を与え、命の真の偉大さを見出します。キリストは、私たちがキリストに付き従うため、キリストを真似るため、人々にキリストのことを知らせるために、私たちをお呼びになりました

イエスはご自分が望まれる人をご自 分のもとにお招きになります。自分 の周りの状況が何であろうと、召命 は、神の側からの選択ですから、 いったん召命が受け入れられれば、 人間的詮索、人間的評価、人間的是 認で考えられることは決してあり得 ません。粗末で近視眼的な人間的推 理では、それを完全に理解すること はできないのが常です。神は、召命 と共に最後まで召命に堅忍するため に必要な恩恵をいつもお与えになり ます。なぜなら、聖トマスが説いて いるように、神は、盲教のために選 ばれた人々を準備され、神のみ旨を 行うことができるために彼らを配置

されるのです⁸。 この使命をまっと うするにあたって、「人は、生命の 真の偉大さを見出します。なぜな ら、神からの招き、つまり神が人間 存在の神秘に関して行われる啓示 は、人間の命の存在とその意味を明 らかにするメッセージだからです。 人が、自分自身を理解するようにな るのは、神の言葉を聞き、受け入れ ることによります。こうして人間の 全存在は、首尾一貫性を持つことに なります。このために、私自身に とって不可欠な人間らしさ、つまり 完全な誠実さと私自身の存在のうち にある首尾一貫性は、私たちを招か れる神への委託をとおして生じま す | ⁹。 召命に対する忠実は、神へ の忠実です。それは、神が私たちに 委託され、私たちが創造された理由 である使命への忠実でもあります。 ですから、召命への忠実は、特別で 個人的に神に栄光を与える道になり ます。

キリストの傍での新しい生活は、当 時の12使徒のためでした。その中の 一人ユダは、明らかに選ばれたにも かかわらず、忠実ではありませんで した。年月が経つにつれて、他の使 徒たちは、自分が選ばれた瞬間を、 牛涯のうちで最も重要で紹自然的な 瞬間としてよく思い出したことで しょう。神は、たとえ人間的な視点 から見れば、そのような到達できそ うにない重大な仕事のために必要と される資質を備えた者が誰もいなく ても、この人たちを使いたいと望ま れました。弟子たちは従いました。 彼らは素直でした。彼らは必要とし た恩恵を受け取り、神は、大変特別 なやり方で彼らの世話をしました。 だから、弟子たちは、神が委託され たメッセージを、地の果てまで伝え ることができたのです。

私たちの時代にもまた、主は、秘跡を受けることや祈りの生活において、神との親しい深い会話におい

て、また個人的聖性において、ご自 分と共にいるよう使徒たちを招いて おられます。そして、彼らを宣教に 送り出し、あらゆる状況の中で使徒 職を行うようにされます。また、主 は、ある人々を、個人的に特別なや り方で招かれますが、信者なら一人 残らず、キリスト教的な生活、たと えそれが平凡であってもそれを通し て、特別の召命、つまり、キリスト に従い、新しい生活に入る道へと招 かれます。そしてその新しい生き方 の鍵は神であるキリストが持ってお られます。つまり、「わたしについ て来たい者は」 10 というお言葉で す。初代のキリスト者は、「自らの 生き方は常に神の呼びかけ(召し出 し) の実りであると考えていまし た。すなわち、ローマやコリントで 洗礼を受けた人たちは、「神に召さ れた聖なる人々」でした 11 。

様々な方法で、キリストは、私たち 全員を招かれ、自分を見習い、自分

十全なキリスト教的生き方は、すべ ての徳を生きる英雄的行為を要求いる ます。多くの人が人生で企て入れる 生活様式や野心が、キリスの中ない をがいる状況の中ない。主は、私るの厳密な意味で聖であるかなら が、この厳密な意味で聖明らないが、 を引きつけるものでなければ会うを ず、他の人が、キリストに出る ず、に誘うものでしょう。主は必要な 力と助けを与えてくださるはずです。神に従い、忠実であるように、 私たちすべての者に与えてくださる こうした手段を無視したり、注意を 払わなかったりするのは軽率です し、神が、現世の仕事の只中で使徒 的独身に招かれるならば、その手段 は、特に必要なことになります。

神が、私たちの良い意志と、どこにいようとも奉仕に限界や条件を定めずに従う決心を頼りになさることができるよう、しばしば神にどのように申し上げたらよいか、わかっていますように。

14. 3 神から受けた個人的召命に 対する忠実

個人的召命の発見は、全存在における最も重大な瞬間です。私たちの幸福と他の多くの人々の幸福は、この呼びかけに対する忠実な応え次第です。神は、私たちを創られ、準備され、神のご計画どおりに私たちを招

かれます。今日、目的もなく楽な高 らしをして、狭い見方で殻に閉くない見方でおが多なに閉くながって過ごすとりもさず、ななも直さずで表れなのからです。「人生をするのは、といるのは、自分の召命を自覚することに意味をもかけることとなける」のです。。 な仕事を充実させ、がしまれる。味をもながしまれる。。 な仕事を充実させ、たせる」のです。。。

キリストに従おうと最初に決心した ことは、一生をとおして神に応える ための土台になります。忠誠は、ほ とんど超自然的なこととは関係のな い事、日々の平凡な小さな行為や義 務の中で、自分の生命のまさに本質 そのものに害を与えるものを繰り返 し拒絶しながら、日々築かれていく ものです。 単に召命をそのまま維持するだけで は十分ではありません。簡単にみえ るとき、また、すべてのことがうま くいかず困難に思える別の機会に悪 魔の攻撃、現世と肉が全勢力で探し まわり圧倒させるとき、召命を新た にし、常に再度確認することが必要 です。そうすれば、信仰深くあるた めに必要なあらゆる助けが常に与え られるでしょう。困難が大きければ 大きいほど、恩恵も大きいのです。 かなり具体的な良心の特別糾明で、 よく工夫された内的戦いを続けるな ら、時とともに愛が成長し、強くな ります。そうすれば、自己に打ち勝 つことは、単なる日課に陥るどころ か、意識的で成熟したものになりま す。多くの小麦のように量を増すだ けではなく、熱がさらに熱くなる、 或いは科学が新たな結論に至るので はないが、もっと深く洞察し、さら に一体化され、より確実になるとき のように、質を高めることです。同 様にして愛徳は、私たちが何にもま

して神を、そして隣人を、自分のように、純粋に、親密に愛するように導きます。このようにして、この世においても永遠においても神に栄光を与えるのです14。これこそが、神が私たちに願っておられる愛の成長なのです。

キリストのために、またキリストゆえに、すべての聖性と愛において成長するように努力するなら、信仰を確かなものとすると共に、喜びと愛が増すことを体験するでしょう。私たちの生涯は、完全に意味深いものになるのです。

聖パウロは、キリスト者の内的戦いは、朗らかで、実質的には超自然的な「オリンピック」のようなものでなければならないと説明して、競技場の運動競技の比喩を使いました。使徒は、まだ完成に至らないと気づけば、約束された報いを勝ち取るために戦います。「なすべきことはた

だ一つ、後ろのものを忘れ、前のも のに全身を向けつつ、神がキリス ト・イエスによって上へ召して、お 与えになる賞を得るために、目標を 目指してひたすら走ることですし ⁵。ダマスコへ行く途中でキリスト が聖パウロの生活に介入された時か ら、全力でイエスを探し、愛し、奉 仕するために自分自身を捧げまし た。使徒たちは、イエスが、傍を通 り過ぎて彼らを呼ばれた日から全く 同じようにしました。彼らの欠点は 直ちに消えてはしまいませんでした が、日毎に強くなる友情で主に従い ました。彼らは忠実だったのです。 私たちもこのようにしなければなり ません。主がくださる恩恵に一致 し、毎日忠実でなければなりませ ん。このようにして私たちは、キリ ストが私たちを待っておられる目的 地に到達していくのです

¹ ルカ8・12 参照

- 2マルコ3・13-19
- ³ ヨハネ15・16
- ⁴ ガラテヤ1・1
- ⁵ 二テモテ1・9
- 6 同上
- ⁷ ーコリント1・26
- ⁸ 聖トマス・アクイナス 『神学大全』 3:27,4 参照
- P.Rodriguez, Vocation, Work,Contemplation, Pamplona, 1986
- 10 マタイ16・24
- ¹¹ ローマ1・1-7、ニコリント 1・1 参照
- 12 第二バチカン公会議 教会憲章 40
- $^{13}_{-}$ フェデリコ・スアレス 『ナザレトのマリア』

¹⁴ R.Garrigou – Lagrange, The Mother of the Saviour

__ フィリピ3・13-14 参照

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/TO-II-kin/ (2025/12/14)